

【寄稿】

マルチモダリティ, メディア・リテラシー, 政治性

門倉 正美*

『リテラシーズ』をざっと読む

『リテラシーズ』の学術雑誌としての特徴は、(1) 投稿資格を問わない、(2) ウェブで公開される、(3) 編集委員が全員で査読する、(4) 日本語教育、言語教育にとどまらず、「ことば・社会・文化」を統合する視点を求める、という点にあった。

誰でも投稿でき、誰でもウェブで無料で閲覧できるという風通しのよさは、2005年の創刊時は、学術雑誌として珍しい試みだった。国際交流基金が刊行していた『世界の日本語教育』が応募資格を問わない学術雑誌だったが、他にはあまりなかったように思う。また、結構な数の応募原稿のすべてに編集委員全員で目を通し、査読のための議論をするという点も、他にはあまり例がないだろう。大量の投稿原稿を読み込み、査読コメントを入れたものを持ち寄り、「リテラシーズ」科研代表者の佐々木さんの勤務する桜美林新宿サテライトで忌憚のない意見を交わし合ったことを懐かしく思い出す。

4つ目の特徴である「ことば・社会・文化を統合する」という点については、もっと幅広い書き手に呼びかけるべきだった、と今にして思う。かねがね思っていたことだが、日本語教育の世界では、どうしても文学・語学研究を出自とする教育研究者が圧倒的多数派であり、社会・文化、さらには経済・政治といった社会科学の修練を経た教育研究者はきわめて少ない。そうした数少ない「社会派」日本語教育研究者を掘り起こして、応募を呼びかけるべきだったと反省している。

あらためてウェブで公開されている既刊『リテラシーズ』の投稿者をざっと一覧すると、編集委員の口コミによる投稿と思われる論考が多い。や

むを得ないことだし、権威ある査読誌が少ない日本語教育研究界において、それによって多くの人材の育成に多少なりとも貢献できたことは確かだろう。しかし、さらに広範な投稿呼びかけが必要だったのではないか。ただ、海外の日本語教育機関をはじめとして多様な機関からの投稿が見られる点は、日本で刊行されている日本語教育学関連の学術雑誌としては貴重な貢献を果たしたと言えるだろう。

ウェブ版『リテラシーズ』掲載論文の内容を通覧すると、『リテラシーズ』という雑誌タイトルに編集委員たちが込めた問いかけに応える投稿がもっとほしかったという思いを否認しない。この点についても、刊行初期の号に編集委員からのメッセージをもっと強く発信する必要があったのではないかと反省している。ウェブ誌掲載論考をまとめたうえで、編集委員の論考を付加することによって、紙媒体の雑誌も第4号まで刊行していた。それらの編集委員の論考4編(第1号川上、2号細川、3号門倉、4号川上)は、それぞれに『リテラシーズ』という「リテラシーの複数表現」のもつ意味を説いているが、そこには「多種多様なリテラシー」探究への強いメッセージ性をもった呼びかけはなされてはいないように思う。

「総括討論」(『変貌する言語教育』所収)の問題提起性

今回、『リテラシーズ』の歩みをざっと振り返ってみて、私が「さまざまなリテラシー」というテーマでの議論でもっとも鮮烈な印象をうけたのは、『リテラシーズ』誌中の文章ではなく、『変貌する言語教育』(佐々木、ほか、2007)巻末の「総括討論」とその「振り返り」の部分である。

『変貌する言語教育』は、リテラシーズ編集委員たちが『リテラシーズ』第1号を2005年5月に

* 横浜国立大学(名誉教授)

Eメール: masamikadokura@hotmail.com

刊行した後、同年9月に総力をあげて取り組んだ国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」での講演および討論と、その総括の記録である。

研究集会では、クラムシュ（カリフォルニア大学バークレー校¹）、ロビアンコ（メルボルン大学）、ザラト（フランス国立東洋文化研究所）という世界の言語教育のビッグネームと、『リテラシーズ』編集委員の細川さん、川上さん、砂川さんががっぷり互して対論を展開する中で、「さまざまなリテラシー」のあり方が浮かび上がる構図になった。本としてまとめるにあたって、他の編集委員も交えて、研究集会の内容を振り返りつつ、「さまざまなリテラシー」をめぐって、細川さんが愛用する表現を借りれば、「熱い議論」を行ったのが、「総括討論」である。

この「総括討論」と「振り返り」に目を通してみて、ここで積み残された多様な議論を各編集委員が掘り下げる論考を初期の号でもっと展開することによって、『リテラシーズ』という雑誌の目指すものがより鮮明に打ち出せたのではないかと強く思った。もっとも、第1号の川上論文は「言語能力」観を根本から問い直すことによって、また、第2号の細川論文は自らの「文化リテラシー」概念を明確化することによって、「総括討論」の内容を受け継ぐ役割を果たしているとも見ることが出来る。とは言うものの、「文化リテラシー」、「第三の場所」、「言語教育における評価のあり方」、「メディア・リテラシーと言語教育の関係」、「コミュニケーション能力のあり方」、「教室内の権力関係」などをめぐる、「総括討論」における「熱い議論」のカオス性は、さまざまなテーマへの熟成をはらんでいたように思う。上記の川上さん、細川さんの整序された論考からは、当然のことながら「総括討論」の議論のプロセスをうかがうことはできない。「総括討論」が、雑誌『リテラシーズ』とは離れた単行本の中に収まってしまったのは、少々残念である。そのエッセンスなりとも、ウェブ版『リテラシーズ』の付録として、何らかの形で掲載しておけば、『リテラシーズ』という雑誌の背景をなす問題群が読者にも瞥見できたように思う。

1 文中の所属はいずれも2005年当時のものである。

マルチモダリティ（多様な媒体・位相での表現）

編集委員による雑誌の方向性への関与としては、委員による投稿の他には、『リテラシーズ』第4号巻末の、編集委員による「中間総括」の記述がある。出版社の都合によって紙媒体の刊行をやめることになったのを契機に、各編集委員が『リテラシーズ』のそれまでのプロセスを振り返ったものである。私は、そこで「リテラシーズ」における「ズ」、すなわちリテラシーの複数性の意味合いに焦点をあてた。

複数性の意味するところの第一は、単数性、すなわち標準的リテラシーの規範性に抗する意志である。私が強い刺激を受けた、英語教育におけるマルチリテラシーズ (Multiliteracies)² は、この点を Englishes (さまざまな英語) という表現によってはっきりと宣言している。すなわちアメリカ東部インテリ白人の英語にせよ、イギリス王室の英語にせよ、英語の単一標準の権威を認めず、多様な英語を生きる姿勢を表明しているのである。『リテラシーズ』における「さまざまなリテラシー」も、この種の批判精神を保持しつづければならない。『リテラシーズ』の論考においても、もう少しメタ日本語教育的ないしメタ日本語的な「批評性」をもった論考があってもよかったのではないか。

次に私が注目したいのは、マルチリテラシーズでは、リテラシーの複数性の局面を、「多種多様な英語のあり方」という言語の位相においてだけでなく、「空間、音響、ジェスチャー、視覚」などの言語以外の表現位相にも求めていくという点である。こうした多様な位相への開示は、知性の多元的なあり方を探究している「多元的知能理論」³ が言語的知能の他に「音楽、身体・運動、論理・数学、空間、人間関係、内省、自然との共生」などの領域に対応する知能を認めていることと呼応していて共感できる。

つまり、「さまざまなリテラシー」の探究は、言語以外の位相の表現や知性を包含する視野をもつことによって、より豊かな領域に開けていく可

2 マルチリテラシーズについては、Cope & Kalantzis (2000) を参照。

3 多元知能理論については、ガードナー (2003) を参照。

能性を有しているのである。この点については、多元的知能理論を小学校教育に適用した実践的指導書である『マルチ能力が育む子どもの生きる力』（アームストロング、2002）をぜひひもといていただきたい。そこには、日本語教育に応用できるマルチモダルな教授法が満載されている。

メディア・リテラシー

私自身は、メディア・リテラシーを日本語教育に活かす手法をさまざまに試行する中で、上記の二つの「マルチ理論」、マルチリテラシーズ、マルチプル・インテリジェンス（多元知能理論）に出会った。メディアには、視覚表現や音響表現をはじめとして、二つの「マルチ理論」が探究している表現体があふれており、それらのコードや文法を探って、教育の場に還元していく必要があるからである。

メディア・リテラシーの日本語教育への導入を目指す科研共同研究の一環として、私は岡本能里子さん（東京国際大学）、奥泉香さん（日本体育大学女子短期大学部）と協働で、2010年に「リテラシーとメディア・リテラシー」と題するシンポジウムを開いた。当時のメディア・リテラシーを牽引していた水越伸さん（東京大学）の基調講演に加えて、絵本、音響、ソーシャルメディア、映画の「リテラシー」や「読む」活動の捉え直しに関する国語教育、日本語教育、社会学、心理学、教育学、文学などの学際的な研究発表が行われ、充実した内容だった。リテラシーズ叢書の一環として、その際のシンポジストによる論集を編もうとしたが、挫折してしまったのが心残りである。

メディア・リテラシー教育研究では、国語教育との連携をはじめとして、かなり多方面の学問領域の方々と協働でき大いに触発されたが、どういふわけか、2000年前後をピークとして、メディア・リテラシー教育研究は下火になってしまった⁴。

その一因としては、英語圏でのメディア・リテラシー研究がその後、デジタル・リテラシーに守

備領域を移していったこともあったのかもしれない。メディア・リテラシーが「民主主義の担い手」の育成を根底としていたように、デジタル・リテラシーにおいては、ネチズン（net citizen の略）の育成が一つの重要な課題となる。しかし、私が強く関心をもったのは、デジタル・ライティングという領域である。デジタル・デバイスで「作文」するということは、単にワードでテキストを入力するというにとどまらず、デジタル・ネイティブである現今の日本語学習者が音響や映像、URLへのリンクなど多種多様な方法によってマルチモダルな表現体を組み込むこともできるからである⁵。

マルチモダルな教育研究の可能性豊かな領域として、最近私が注目しているのはスマホの学習支援アプリの作成である。長年、日本語教育に携わってきて、日本語の学習辞書にこれはと言えるようなものがないことを不思議に思うとともに、残念に思ってきた。ところが、近年スマホの学習アプリがかなり進化してきており、その中には使い勝手のよいマルチモダルな学習辞書に成長し得る可能性をもっているように思えるものもある。そうしたアプリの開発者たちがクリエイティブ・コモンズの精神をもって協働する動きもあるということに心強く思っている⁶。

バイラムの言う「政治性」

先にあげた『変貌する言語教育』の中で、私が魚の骨がのどに刺さったような感じで、今でもその含意を反芻しているのは、国際研究集会の全体的コメンテーターであったバイラムの言葉である。「ひとこと言えば、言語教授は政治的だ。…次の国際会議も、『言語教授の政治（性）』というテーマで行われると、非常に興味深いものとなるだろう」⁷。

5 この点では、Hicks（2013）を参照。

6 砂川（2020）が、こうしたスマホ辞書アプリ開発の活況を伝えている。私自身は、近年、多読を日本語教育に導入する教育研究に力を入れており、多読を促すような「読解支援アプリ」が作れたら、広範な日本語学習者にとって非常に有益だろう、と思っている。

7 上記、佐々木ほか（2007, p.186）。なお、バイラムの言う「政治性」については、バイラム（2015）も参照。

4 メディア・リテラシー教育研究が低調になったということは、メディア・リテラシーの必要度が少なくなったということの意味するものではない、むしろない。フェイクニュースが跋扈し、ファクト・チェックが必要となっていること一つをとっても、現在ほどメディア・リテラシーが重要な時代はないほどである。

先にふれた「総括討論」の中で、細川はバイラムの「政治性」に対する考え方を引いて、「言語教育とは、個人と個人が違う価値観をぶつけ合う〈政治〉の場である」と主張する。それに対して、私は、そうした言い方では「政治性」をあまりに抽象的・包括的に捉えてしまうことになり、あえて「政治性」として捉え返す意義が分からなくなってしまう、と思った。そこで、「外国人学習者が置かれている社会的・経済的・政治的な位置を、言語教育の場の中で〈政治的〉な視線で見ていく必要があるのではないか」と反論した。その後、他の編集委員のコメントもあってしばらく「言語教育の政治性」の議論がつづいた。そしてさらに、「評価のあり方」をめぐる、教室における教師／学習者間のミクロな権力関係の問題として「政治性」は再び熱く議論されることになる。

しかし、「言語教育の政治性」という問題系は、「総括討論」の中の議論だけでは私には不消化感が強く残った。そもそも1492年に、当時のカステリアの修道士ネブリハがイザベラ女王に「カステリア語文法」を献じて以来、近代国家語の教育は「政治的」に行われ続けてきた⁸。『変貌する言語教育』に登場するクラムシュ、ロビアンコ、ザラトの外国人言語教育者はこの点の「政治性」を社会科学的に捉え返す議論を提示していたのに対し、細川さん、川上さん、砂川さんの対論にはそうした「政治性」への着目は概して弱かったように思う。もちろん、その後、細川さんが「ことばの市民」を唱えるようになり、川上さんが「年少者日本語教育」の政治的局面に積極的に関わっていったことを、私は高く評価している。

そして、私自身は、「学習者が置かれている社会的・経済的・政治的位置」を少しでも好転させるための日本語教育推進法の法制化をめざす努力に加担した。すなわち、日本語教育学会内の日本語教育推進法法制化WGに参加し、推進法に積極的な政治家へのロビイングを行ったりもした⁹。また、「多文化社会を担う人づくり」を共通課題として設定した多文化関連4学会（異文化間教育学会、日本語教育学会、国際理解教育学会、日本コ

ミュニティ心理学会）連携¹⁰に日本語教育学会代表として参加し、4学会連携のワールド・カフェ、シンポジウム、実践研究のあり方をめぐるセミナーの企画に連なった。

しかし、こうしたマクロな「政治性」と、言語教育／学習の場におけるミクロな「政治性」に徹底する「言語教育の政治性」への探究を怠っているために、私にとってバイラムの一言がのどにひっかかる「魚の骨」になっているということなのかもしれない。

追記：筆者が『リテラシーズ』の編集委員を務めた期間は、創刊の2005年から2011年までである。そのため、本稿での振り返りが『リテラシーズ』活動の前半期に偏してしまっていることをお断りしておきたい。

文献

- アームストロング, T. (2002). 『マルチ能力が育む子どもの生きる力』(吉田新一郎, 訳) 小学館.
- ガードナー, H. (2003). 『多元的知能の世界——MI理論の活用と可能性』日本文教出版.
- 佐々木倫子, 細川英雄, 砂川裕一, 川上郁雄, 門倉正美, 牲川波都季(編) (2007). 『変貌する言語教育』くろしお出版.
- 砂川有里子 (2020). 多様性に対応できる日本語学習辞書の開発に向けて『AJALT』43.
- 田中克彦 (1981). 『ことばと国家』岩波新書.
- 日本語教育政策マスタープラン研究会 (2010). 『日本語教育でつくる社会——私たちの見取り図』ココ出版.
- バイラム, M. (2015). 『相互文化的能力を育む外国語教育——グローバル時代の市民性形成をめざして』(細川英雄, 監修, 山田悦子, 古村由美子, 訳) 大修館書店.
- 横田雅弘 (2012). 「多文化社会を担う人づくり」に至る道程とその意味『異文化間教育』2012, 1-18.
- Cope, B., & Kalantzis, M. (Eds.). (2000). *Multiliteracies: Literacy Learning and the Design of Social Futures*. Routledge.

8 田中(1981)を参照。

9 日本語教育政策マスタープラン研究会(2010)に、日本語教育推進法WGでの議論の成果が盛り込まれている。

10 多文化関連4学会連携の活動について日本語教育界であまり知られていないので、異文化間教育学会からの観点ではあるが、横田(2012)における報告を参照していただきたい。

Hicks, T. (2013). *Crafting Digital Writing: Composing Texts across Media and Genres*. Heinemann.